

源氏物語講座

中卷



東京大学文学部源氏物語研究会編

東京大學源氏物語研究會編

源氏物語講

中卷

昭和二十四年十月二十五日印刷
昭和二十四年十月三十日發行

源氏物語講座

中卷檢印

定價 二百二十圓

編者

東京大學文學部
源氏物語研究會

發行者

東京都中野區千光前町一八
前田吉夫

印刷者

東京都豊島區日之出町一ノ一二九
長沼滋雄

發行所

東京都中野區千光前町一八
合資會社
紫乃故郷舍
振替東京四八〇二二

源氏物語小見

島
津
久
基

一、源氏物語と枕草子

紫女は清女に對して性格の相容れざるものがある上に、公私兩様の意味に於て競争意識に驅られ、自己の優越を信じたい氣持から、嫌惡と嫉妬とを感じ、侮蔑と冷罵とをすら浴せて溜飲を下げてゐる〔紫日記〕が、源氏物語の中には、その當の敵手清少納言の枕草子からさへも、知らず識らず影響されてゐるのではないかと思はれるやうな箇所がある。

清女が源氏物語を讀んだかどうかはわからぬが——全卷でなくとも少くとも一部は讀んだかも知れないと思ふ——、紫女は枕草子を恐らく讀んだのではないかと思はれる。紫女が源氏物語の筆を執り初めるまでに——或は已に一部書きかけてゐたのであつてもよい——枕草子は宮廷の誰彼に觸目せられ、評判にもなつてゐたのであらうと想測しても、大過ないであらう。卷末自記の跋文によつても、此の推斷は許されねばならぬ（若し亦その後附せられた「左中將まだ伊勢守と聞えし云々」の文が、何人の手によつて追記せられたに關せず假に信を措き得られるものならば、左中將源經房が伊勢權守に任じた長徳元年正月十三日〔公卿補任〕から、その任が終つた長徳三年正月二十八日（この日の縣召除目で備中守に轉じた〔公卿補任〕）までの間に、流布の端を開いたと觀られねばならないであらう。それならば一層上の——紫女が枕を讀んだらうといふ——推測はさまで無稽な想像ではあり得ない事になるであらう。尤も經房が伊勢守時代に、枕草子が人々に讀まれるやうになつたとしても、それは枕草子全卷ではなかつたであらうことは、枕草子には長徳三年二月以後——長保二

年八月まで——の記事も含まれてゐるのでも知られるが、この以後の分も亦、一度他人に讀まれ初めた以上強ひて隠しもせず、寧ろ一種の得意さすら藏して、讀者の間に廣がつて行くにまかせたのではないかと考へられる。そして年代の明らかに推斷出来る記事としては、「成信の中將は」の段の長保二年八月が最も新しいのと、定子皇后の崩御及崩後の記事乃至皇后を御追憶申上げる記述の含まれてゐない點から觀て、枕草子の成立は皇后崩御（長保二年十二月十五日夜）以前と目してゐるのではないかと思ふ。少くとも殆ど大部分は崩御以前に成つて、且人々に讀まれ初めつゝあつたと考へてよいであらう。

元來紫女が清女と和泉とを痛烈に論難してゐるのは、一面潜在意識的に二人を畏れてゐるからだとも觀られる。帚木卷の雨夜の品定の女性論に於ても、兩女、就中清女を目標とした點があるらしい事は、日記と品定とを對照すると首肯される。それでゐて源氏の中に枕草子の内容と交渉のあるやうな箇所が時折出て來るのが甚だ面白い。その品定の女性論でも、紫女の平生の持論の發表ではあるが又、その動機と潜在的な對抗意識とに於て、枕草子の男性論（「男こそ猶いとありがたく」の段）に刺戟せられた意味は全然ないであらうか。兩者を併讀してこの感を深うする。又その品定の中の蘇食ひの賢女と藤式部女の話柄は、藤原爲信（式部の母方の祖父、集の詞書が典據であらうが話の内容は宛然枕草子中の清女と修理亮則光である。そして若し吾人の推定のやうに、後者が前者の場合のモデルに近い役目を勤めたのであつたら、それは事實談として傳聞した事件を素材としたといふ程度でなく、それ以上に寧ろ枕草子からの直接の影響と觀たいと言はざるを得ないほど、兩者の記述に文詞の上にまで交渉を想はせるものがあるからである。

更に權卷の「一年中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど云々」の文は、長徳四年十二月の大雪に禁中の所々——特に中宮定子の御前の壺——や道長の邸等に雪山が作られた事實を指してゐることは疑無いが、そしてそれはこの有名な事實からだけの直接の影響と觀る事も無論可能であるけれども、若し枕草子を紫女が讀んでゐたのだつたら、あの有名な雪山の條の記述が、同時に影響してゐると觀ることも極めて自然な推測であらねばならぬ。且、權卷の同じ條の前段に「雪の夜の澄める月に雪の光り合ひたる空こそ、怪しう色なきものの身にしみて……すさまじき例に言ひ置きけむ人の心淺さよ」といふ一文がある。花鳥餘情(第十一)はこれに

清少納言と紫式部とは同時の人にて、挑み爭ふ心もありしにや、十二月の月夜、少納言は「すさまじきもの」と言ひしを、式部は「色なきものの身にしむ」と言へり。心々の變れるにや。

と評註してゐる。現存の枕草子「すさまじきもの」の段には「しはすの月夜」の詞は見えない(弄花抄・孟津抄等にも指摘してある)。し、又「十二月二十四日」の段には却つて雪に照り映える明月のをかしさを賞めてゐる位であるが河海抄(卷第九)には、簗日記に「あなすさまじ、しはすの月夜にもあるかな」とあるを擧げてゐる他に、

清少納言枕草子一十列冷物 十二月々夜 十二月扇 十二月蓼水 老女假粧 女醉 胡瓜老 法師醉舞

無酒(調イ) 神樂勅使 社打内競馬 昆崙八仙 畫舞

と註してある。花鳥は恐らくこれを承けたのかも知れないが、そしてこれだけでは或は河海の著者は何かの思

ひ違ひかも知れぬとも考へられるが、更に河海（卷第一八）には總角卷にも、

清少納言枕草子に「すさまじき物。しはすの月夜、おうなのけさうおうなとは姫也。老姫の事也。裏書には、老たる女也。

と出てゐるのを見ても、裏書までしてあつたとすれば、又右のやうな書加へのしてあつた、或は斯ういふ一段を含む——少くとも後に引かれたやうな——枕草子異本が傳つてゐたのかも知れない。前出の文に於ける紫女の筆致が何となく清少に意識的に突懸つて行つてゐるやうな口氣が感ぜられるのは——花鳥餘情の兼良の感想はこの意味で如何にも無理ではないと言へる。河海所引の文の通りでなくても、紫女の見た枕草子に此の意味の文があつたからではないかと臆測さへして見たくなる程である。が、これは確證が無いから唯想像だけに止まる。併し同じ段のその「人の心淺さよ」の下に「とて、御簾捲き上げさせ給ふ」とあるのは、例の香爐

峰の聯想で、それも白氏の句からの直接の聯想と言ふよりは、枕の清少の機智から來てゐる——これも事實と同時に枕の記述と併せて——と觀る方が自然のやうに思はれる。總角卷の

雪のかきくらし降る日、終日にながめ暮して、世の人のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の曇なくさし出でたるを、簾捲き上げて見給へば、向の寺の鐘の聲、枕を欹てて、今日も暮れぬとかすかなるを聞き

とある文に至つては、愈々同じ推測が躊躇なく下し得られるであらう。そして偶然ではあらうが——雪の日の月には紫女にはいつも自ら聯想されて來る癖がついてゐた爲に、重複したのであらう。——此處にも亦「十二月の月夜」が出て來てゐる。（前出河海抄同卷註參照）

かうして枕と源氏との交渉といふことを容認して、改めて兩書を對比して來ると、夕顔卷の「八月十五夜云々」の條（特に「壁の中の蟋蟀だに云々」及び御嶽精進の曉のぬかのあはれさ等）及び少女卷の幼い戀をせかれる夕霧・雲居雁の二人が、障子越しに別れを惜しむ條、竹に待ちとられてそよぐ風の音に、雁の聲を添へる情景の如き、枕草子 あはれなるもの」の段（特に「よき男の若きが御嶽精進したる。隔て居て打行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり」又「川竹の風に吹かれたる夕暮。曉に目さましたる夜なども。すべて思ひかはしたる若き人の中に、せく方ありて心にしも任せぬ」を、又玉鬘卷の初瀬詣は枕の初瀬詣（正月に寺に籠りたるはこの段、野分卷は枕の「風は」「野分の又の日」の段などを想起させる。

二、紫女の歌學歌論觀

○

机上の源氏物語を披いたら、玉鬘卷だつた。歳暮の衣配りに、東院の末摘花から來た禮狀に、

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてむ袖をぬらして

と、例によつて縁語づくしの「唐衣」の名吟が、ベタ／＼と四角ばつて古風な手で並べてあるので、恐れをなした光源氏、

恥かしき君なり。古代の歌よみは、から衣袂ぬるゝかごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。更に一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ、妬きことはあれ。

と、千嗟萬息である。蕉翁の「此の一筋」ならよいが、唐衣の一筋なんぞ、全く忝さに涙こぼるゝ方である。そして「まろも同列」と自嘲しながら、毒舌口を衝いて出て、昔の戀歌には、紋切型で「あだびとの」といふ五文字を、「やすめどころに打置き」だの、末摘君がいつぞや御父常陸宮から傳へられた「和歌の髓腦」を讀めと貸與されたが、あまり煩瑣な法則づくめで、「病去るべき所多」かつたので、もとより未熟な我等、そんなものを御手本にはいいよ／＼手も足も出なくなるばかりだから、「むづかしくて返して」しまつたなぞと、皮肉たつぷりで紫上に話してきかせる夫の君である。

姫君（明石姫）の御學問に（歌學ナドハ）いと用なからむ。
と教育方針を、やはり紫上に指示するのも、その話のついでだつた。

かう思ひきり罵倒されては、公任卿なぞまるで顔色なしである。

行幸卷にも大宮（葵上生母）の

ふたかたにいひもてゆけば玉くしげ我がみ離れぬかけごなりけり
の一首を、又源氏が苦笑して吐いた

よくも「玉くしげ」にまつれたるかな。三十一文字の中に、他文字は少く添へたることの難きなり。
の寸評は更に辛辣。

これでも公任はじめ歌學者連中、皆これを讀んでゐただらうに。いや、「若紫やさぶらふ」と酔つばらつて大騒したのは、四條大納言その人ではなかつたか。

その後の平安末から中世への歌學歌論者群、口を揃へて、源氏は和國の至寶だの、源氏みぬ歌よみは口惜しいだのと、囂しく言ひ立てながら、何處を讀んでゐたらうと思ふと可笑しい。やつつけられてゐて、知らぬが佛どころか、しきりと有難がつてゐるのはいゝ氣なもの。源氏物語の餘德廣大無邊、紫式部は愉快な女だった。

○

石原正明は、註釋書といふものは眠たいと言つた。中世の歌學歌論書といふものも、亦隨分と眠たいものである。讀み通すのにはなか／＼勇氣と根氣がいる。どうやら「姫君の御學問」にだけではないと、言添へてみたくなる。

○

宣長の「うひ山ぶみ」に

今の世にいたりても、歌學の方よろしき人は、大抵いづれも、歌よむ方拙くて、歌は、歌學のなき人にも、手が多きもの也。

と言つてゐるのが面白い。しかも

さりとて歌學のよき人のよめる歌は、皆必ずわろきものと、定めて心得るはひがごと也。此の二すぢの心ばへを、よく心得わきまへたらんには、歌學いかでか歌よむ妨げとはならん。

と附け足してゐる所は、やはり學者、研究者としての理論的な鈴屋大人が現前する。勿論紫式部もその邊百も

承知だ。

三、宣長の物のあはれ論と紫式部の物のあはれ観

玉の小櫛の宣長の所謂物の哀れ論が、従前の儒佛に偏倚した僻見を打破して、源氏物語の眞髓を捉へ得た千古の卓説であることは、今更暇を要せぬ。文學論としても、紫式部の物語論を演繹し解剖し、一層組織立てて、小説——同時に文學の本質と使命とを闡明した堂々たる宣言で、世界の文藝評論史上に押出しても、毫も遜色の無い大文字である。

唯、宣長の所説は、その考究の對象とした源氏物語——正しく言へば、實は考究の手段に乃至材料にしたのであるが、過程としても結果としても、それが即ち考究の對象になつてしまつたのであつた。彼にとつては結局それは同じ事であつたのである。——の價値を殆ど絶對のものと觀てゐたことは確で、隨つて——源氏物語が唯一窮極の目的としたのは「物の哀れ」を寫す事であるとの歸結を得るに、前提ともなり又それに自ら隨伴して——その源氏物語の本質と論定した「物の哀れ」の情操を又、理想視、完全視、絶對視し過ぎようとした傾向はなかつたかに、僅少の疑問を懸け得られるやうに思ふのである。

宣長は「物の哀れ」を説明するに、「あはれ」といふ語の語源から説き起した後、

人は何事にまれ、感すべき事に當りて、感すべき心を知りて感ずるを、物の哀れを知るとは言ふを、必ず感すべき事に觸れても、心動かず感ずる事無きを、物の哀れ知らずと言ひ、心なき人とは言ふなり。物の

辨へ心ある人は、感すべき事には自ら感ぜではあらぬ業なるに、さもあらぬは、何とも思ひわく方なくて、必ず感すべき心を知らねばぞかし。(玉の小櫛二の巻)

と釋き、そして源氏物語は、

殊に人の感すべき事の限りを様々書き表して、哀れを見せたるものなり。(同卷)

として、公私の宴樂や儀容や四季の花鳥月雪等の場合を挙げ、又、桐壺卷に於ける弘徽殿の態度の如きを「物の哀れ知らぬを、惡しき事にしたる」一例に引き、最後に、

人の情の感すること、戀にまさるはなし。(中略) かくて此の物語は世の中の物の哀れの限りを書き集めて、讀む人を深く感ぜしめむと作れるものなるに、此の戀のすぢならでは、人の情の、様々と細かなる有様、物の哀れの勝れて深きところの味ひは表し難き故に、殊に此の筋を旨と多く物して、戀する人の様々につけて、なすわざ思ふ心の、とり／＼に哀れなる趣を、いとも／＼細やかに書き表して、物の哀れを盡くして見せたり。(同卷)

と論じてゐる。即ち宣長の解する物の哀れは「人の情の眞實」を根本とする純正な感情で、而もそれが外面に表れる場合には、複雑な相を取るのであるが、大體に於て、「感傷」「感動」「同情」「人情」「風雅心」「趣味性」「美を愛する心」「詩を解する心」と言つたやうな語で、それ／＼の場合が言ひ表され得るやうで、そしてその何れにも亘り、何れをも含むやうなものとも言へるのみならず、且「物の哀れ」の最も深いもの、その最も切なるもの、その最も細やかなものとしての具體的な現れは「戀愛」であり、源氏物語が戀愛を主想としてゐる

のは、この意味で十分に適正なものと言ふべきであると言ふのがその要領である。

眞に肯綮に中つた意見と言はねばならないが、そして「物の哀れを知らぬ」とは畢竟感受性の鈍いことを意味することになるが、意識して「物の哀れを知らぬ」者もあり、即ち禁慾、抑情の生活を營む僧侶の如きそれで、宣長が柏木卷・椎本卷の文を引證して、「法師」と指摘してゐる通りであり、又、反對に「物の哀れを知り、顔をつくりて、情を見せ」るのを、

さる類は眞に哀れを知るにはあらで、うはべの繕ひ事にて、いとうるさき業なればなり。凡て「氣色立つ」「よしばむ」「情だつ」等言へる類は、うはべを作りて、見せんとするものなり。（小櫛二の卷）

と論難してゐるのも正しい解明で、批議の餘地は無いのであるけれども、源語に於て「物の哀れを知り過す」ことに賛し難い意味が述べてあるのを解して、

「物の哀れ知り過し」とは、物の哀れ知れるよしの振舞するをいふ。（小櫛五の卷）

「物の哀れを知り過す」といふを、惡しき事にしたるも、物の哀れを知る事の深きを、過ぎたりといふには非ず。過ぐるとは、さしもあるまじき事にも、萬づに哀れを知り顔なる振舞の過ぎて、或は人にも靡き易に、あだなる等を言ふなり。さればよき程にと言へるも、知り顔の過ぎたるを惡しとして言へるにて、深く知るを惡しとには非ず。（同二の卷）

と述べてゐるのは如何であらうか。「深く知る」のが悪い事ではないといふのは、假によしとして——物の哀れの眞髓を十分に徹底して體感し知得するといふ意味でならば、「深く知る」ことは確に悪いことではない筈で、

最も望ましい、最も理想的な境地でなければならぬ。——そしてそれと「知り過す」とは、全くは同意義でないことも誤ないと言つてよいと思ふが、「知り過す」の意味が、「知り顔なる振舞の過ぎて」、「知り顔の過ぎたる」或は「知れるよしの振舞する」といふのであるならば、前の「知り顔をつくり」といふのと、殆ど何程の距りも無い位に前者の場合に近接したものとなり、或は「知り顔をつくる」ことの「一層甚だしい」、「知り顔をつくる」ことの一層進んだ場合を意味することになりはしないだらうか。勿論、後の「知り過す」といふ場合は、所謂安價なセンチメンタリズムや、通俗的な藝術家氣分やを排撃してゐるのであることは確實である。

——紫女でも、亦宣長でもそのつもりで論じてゐることはわかる。——が、宣長が「知り顔」と言つてゐる用語の紛らはしいのと、且同時にその語についての明白な概念が宣長自身にも確立せられてゐないやうな氣味がある爲、宣長の言はうとしてゐることは大凡理會出来るやうな氣がしないでもないが、猶的確に納得が出来かねる上に、この「知り過す」といふことに關する限り、恐らくは紫式部の意味する所のものとの間に、猶多少の懸隔が存在するのではあるまいかを疑はしめられる。

今「知り顔をつくり」の用例を源語中に求めると、胡蝶卷に、

すべて女の物愼みせず、心のまゝに、物の哀れも知り顔をつくり、をかしき事も見知らむ、その積り味氣なかるべきを、

とあるがそれで、これは宣長の所説のやうに、物の哀れ知りの假面を被つてゐる似而非物の哀れの場合で、即ち不純なものを含んでゐるのであるから、眞に哀れを知る者とは言ひ難い。然るに「知り過す」の方は、尋木

卷にあだな色めかしい女の上を指して、男の警戒すべき「初めの難」と説いた次に、然らば家庭主婦としての最大要件は、家事雑用の専任といふ事で足るべきであらうかと反問を呈しつゝ、

事が中になのめなるまじき、人の後見の方は、物の哀れ知り過し、はかなきついでの情あり、をかしきに進める方、なくともよかるべしと見えたるに、

と假設を掲げて、その「美相なき家刀自」の臺所専門、おさんどん一點張を冷罵してゐる條の用例及びその反證に對する作者紫女の意嚮・信念から推す時は、必ずしも宜長の考へ方、解し方と、全くは同一でないものがあるやうに思はれるのである。もとより結果としては、或は舉動としては、「知り顔つくる」のと「知り過す」のと殆ど同一の相を呈することは有り得よう。併し胡蝶卷の文に觀ても、「物の哀れも知り顔つくる」のと「をかしき事も見知る」のとは、對をなして、同價値を有つ句と解せられると同時に、略々相似た心持、態度を意味し、殆ど繰返して説明的に言ひ換へたやうに解しても大きな誤ではないやうにも思はれる。帚木卷の場合でも、同じ事が言へる。即ち「物の哀れ知り過し」と「はかなきついでの情あり」と「をかしきに進める方」との關係がさうである。夕霧卷にも「物の哀れをも、をかしき事をも見知らぬさまに云々」と對に用ゐられてゐる。又紫式部日記の

艶になりぬる人は、いとすぐろなる折も、物の哀れに進み、をかしき事も見過さぬ程に、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。（清少納言評の一節）

といふ文も、「物の哀れ」と「をかしき事」とを對せしめてある（且、これは「進む」と「過す」とを轉換して

用ゐてある。）。然らば「をかしきに進める。」と「知り過し。」とが相應する意味を持つ事は愈々明瞭で、更にそれは「はかなきついで的情あり」といふので一層具體的に説明されてゐると見ていゝ（一面から言へば、「物の哀れ知り過す」が故に、「はかなきついで的情あり、をかしきに進む」ことにもなるのである。）。兎に角、「進める」「過し」が中正を失うてゐる意味であることだけは、確に知り得られる。「心のまゝに」といふのも、本能の赴くまゝに、感情の流れるまゝにまかせて、抑制を加へぬ意味であると思はれる。然らば「知り顔つくり」の方が寧ろ「知れるよしの振舞する」ことになるのではあるまいか。即ち「知り顔つくり」でも、「知り過し」でも、理想的な典型的な至純な「物の哀れ」の境地——純正な感動がおのづから誤なく、又間隙なく、對象に融化するといふ——からは、問題にするにも値せぬほどの場合であることは明らかであるが、そして宣長でも、事實物の哀れの本態は右のやうであるべき事を説述して居るのであり、似而非なる場合でも恰當する他の語が無いのと、又簡明に理解し易からしめる爲と、且は原作者に用ゐられてあるまゝを用ゐることを妥當と信じたであらうが爲との諸理由から、「知り顔」の場合も「知り過し」の場合も、やはり「物の哀れ」といふ語を使用してゐるだけなのでもあらうと忖度せられるのではあるけれども、併し、少くとも紫女は、「物の哀れ」を宣長の解し、意味させる程、絶對の理想境とは觀てゐないことだけは推斷し得られるのではあるまいか。或は宣長と紫女と、「物の哀れ」に對する觀測の地點が少し異なつてゐるだけで、即ち「物の哀れ」の形態に對する認識の仕方が異なつてゐるだけで、純正なるものとしての「物の哀れ」に對しての兩者の見解は全然一致してゐると考へられるが、宣長は「物の哀れ」を理念視し、窮極視し、固定視してゐる傾向があるに對し